

高専教員になって



橋本千尋

新居浜工業高等専門学校生物応用化学科
[792-8580] 新居浜市八雲町7-1
准教授, 学術 (博士).
専門は高分子物理化学.
c.hashimoto@niihama-nct.ac.jp

時が経つのは早いもので、高専の教員になって16年目となりました。これを読んでくださっている方の中で高専を知っている方はどのくらいおられるのでしょうか。私にとって高専はもはや当たり前前の存在ですが、私自身が高専を初めて知ったのは大学3年生のとき、高専からの編入学生が数多く入ってきたことがきっかけでした。私は興味をもって積極的に話しかけましたが、彼らは本当によく専門科目を勉強していて、学習へのモチベーションもとても高く圧倒されてしまったと同時に、とても気さくで個性的な人が多いことにも驚きました。この違いは、高専生が3年次編入時点ですでに1年間の卒業研究を経験していることや、大学受験を経験していないこと、そしてもちろん私が不甲斐なかったこと等から来ていたのかな、と今なら推察しますが、当時は違う人種に会ったかのような驚きでした。その後4年生で研究室に入ってから、高専出身の先生や先輩、同輩との出会いが折々あり、母校の高専を一度案内してもらったこともありました。

一方、私が幼い頃から将来なりたい職業はずっと小学校の先生でした。祖父母や伯父、伯母、叔母と、親戚に小学校の教員が多く、私自身も小学校が楽しかったこと、小学校教員には女性がずっと働ける仕事という安心感があったこと、教育はとても意義深いものと感じていたこと等理由はいろいろあったように思います。とはいえ最も身近なロールモデルであったはずの私の両親は教員ではなく、母はたまに「これだから先生という人種は嫌だわ」と文句を言っていました(笑)。高校生になって小学校教員の免許資格を取得するための方法を調べたところ、大学の教育学部に入るほかにも通信制があることを知り、若いうちはいろいろ経験を重ねたほうが良いから寄り道してから小学校の先生になろうと工学部に進学しました。しかしながら、当時は今と違ってひどい教員余りの時代で、教員採用試験が何年も実施されないという状況が続いていました。私の友人も小学校教員志望でしたが、大学で教員免許を取得した後、フリースクールなどで非常勤をしながら採用試験の実施を待っていました。そのため私は工

学部で高校教諭の免許を取ったこともあり、小学校でなくても高校の先生でもいいかな……と気持ちを弱らせつつ大学院に進学しました。研究の「け」の字も知らなかった私が取り組んだ高分子ゲルの研究はそれなりに面白く、いかに現象を理解するかというミステリーに取り組むような感じはワクワクするものでしたが、正直なところ研究を職業にするというのは自身の想像を超えている感覚がしてなりません。そしていよいよ先延ばしにしていた職業の選択が迫って悩んでいたときに、この高分子学会でひっそり(?)定期的に開かれていた女性交流会で「今度、私の母校の高専で女性教員の募集があるのですが」というお話をしてくださった方がおられました。もしかして研究を続けながら高校生の教育にも携われるというのは、実は私にとって天職じゃないのか!?という気づきと、じわじわ実感が湧く気持ちになったことを思い出します。

おかげさまでその女性交流会でお話があった高専に採用していただき、現在に至るまで研究と教育を自分のペースでやらせてもらう日々を過ごしています。最近では高分子以外のテーマにもトライして、新しい分野を学ぶ楽しさや、他分野の研究者の方々と協力する喜びを感じることができました。高専は小規模なので学内のほぼすべての教職員と知り合いになりますし、教職員が連携して学生を見守る体制であるのが魅力です。育休後に校務として男女共同参画の仕事をする事になり、学外のさまざまな立場の方と出会う機会に恵まれ、さらに自分の子どもを介して地域のママ友パパ友ができて世界がぐっと広がりました。まさに仕事と私事がリンクしてとても人生を豊かにしてもらった気持ちでいます。子どもが成人するまでまだ少し時間がかかりますが、残りの時間も大事にできたらと思います。そして実は来年4月から2年間、高専機構の同居支援プログラムを利用して実家のそばの高専で働く予定です。国立高専は51校全国に点在しており、各高専で特徴もルールも違いながらも緩やかなネットワークでつながっています。その働きやすさに感謝して、自分が貢献できることに精一杯取り組みたいと思います。